

幾年もたった後

小川未明

青空文庫

ある輝^{かがや}かしい日^ひのことです。父親^{ちちおや}は、子供^{こども}の手^てを引き^ひながら

道^{みち}を歩^{ある}いていました。

まだ昨日^{きのう}降^ふった雨^{あめ}の水^{みず}が、ところどころ地^ちのくぼみにたまつて
 いました。その水^{みず}の面^{おもて}にも、日^ひの光^{ひかり}は美しく照^てらして輝^{かがや}いていま
 した。

子供^{こども}は、その水^{みず}たまりをのぞき込^こむように、その前^{まえ}にくると歩^{あゆ}
 みを止^とめてたたずみました。

「坊^{ぼう}や、そこは水^{みず}たまりだよ。入^{はい}ると足^{あし}が汚^{よご}れるから、こつちを
 歩^{ある}くのだよ。」と、父^{ちち}親^{おや}はいいました。

子供^{こども}は、そんなことは耳^{みみ}にはいらぬように、笑^{わら}つて足^{あし}先^{さき}で、

水みずの面おもてを踏ふもうとしていました。

「足あしが汚よごれるよ。」と、父親ちちおやは無理むりに、やわらかな白しろい子供こどもの

腕うでを引ひつ張ばりました。すると、子供こどもは、やっと父親ちちおやのあとにつ

いてきました。また、二足ふたあし二足あし歩あるくと、また立ち止どまって、

こんどは頭あたまの上うへに垂たれ下さがった木の枝えだをながめて笑わらっていました。

その木きは、なんの木きか知らなかつたけれど、緑みどり色いろの葉はがし

げっていました。そして、その緑みどり色いろの葉はの一つ一つは、青あお

玉たまのように美うつくしく日ひに輝かがやいていました。

父親ちちおやは子供こどもがうれしそうに、木きの葉はの動うごくのをながめて笑わらつ

ているようすを見るみにつけ、また水みづたまりをおもしろそうにのぞ

き込んだようすを思おもい出だすにつけ、この世よの中なかが、どんなに子供こども

の目には美しく見えるのだろうかと考えずにはいられませんでした。

父親は、子供の手を引いて、ゆるゆると道の上を歩いていき
 ました。そして、父親は、自分も、こんなように子供の時が
 あつたのだということ、ふと心の中に思い出したのであります。
 「やはり自分もこんなように、歩いたのである。やはり自分の
 目にも、こんなように、映つたものはなんでも美しく見えたこと
 があつたのであろう。」と、父親は思つたのであります。

しかし、もう、いまとなつては、そんな昔のことをすっかり忘
 れてしまいました。これは、ひとり、この父親ばかりにかぎつ
 たことではないであります。みんな人間というものは一度

経験けいけんしたことも年としをたつにつれて、だんだんと忘わすれてしまうも
のです。そして、もう一度いちどそれを知しりたいと思おもつても思おもい出だすこ
とができないのであります。

「ああ、どんな気持きもちちだろうか？ もう一度どじぶん自分おんもあんな子こども供どもの
時分じぶんになつてみたい。」と、父親ちちおやはしみじみと思おもいました。

この父親ちちおやは、やさしい、いい人ひとでありました。無邪気むじゃきな、世よ
の中なかのいろいろなことはなにも知しらない、ただ、なにもかもが美うつく
しく、そして、みんな笑わらつているようにしか見みえない子こども供どもの心こころ
持もちを、ほんとうに哀あわれに感かんじていました。それでありますか
ら、できるだけ、子こども供どもにやさしく、そして、しんせつにしてやろ
うと思おもいました。

子供は、一二足、三足歩くと足もとの小石を拾って、それを珍しそうに、ながめていました。鶏が餌を探していると立ち止まって、

「とつと、とつと。」といって、ぼんやりとながめていました。また小犬が遊んでいると、子供は立ち止まって、じつとそれを見守りました。

「わんわんや、わんわんや。」と、かわいらしい、ほんとうに心からやさしい声を出して、小さな手を出して招くのでした。

子供にとって、木の葉も、草も、小石も、鶏も、小犬もみんな友だちであつたのです。その父親は、手間がとれても、子供の気の向くままにまかせて、ぼんやり立ち止まって、それを見守つ

ていることもありました。

「なぜ、人間にんげんは、いつまでもこの子供こどもの心こころを失こころわうずしなにいられないものだろうか。なぜ年としを取とるにつれて、悪わるい考かんえがをもったり、まちがった考かんえがをいだいたりするようになるものだろうか。ああ、自分じぶんも、どうかして、もう一度ど、なにも世よの中なかのことを知らしらなかつた、そして、なんでも美うつくしく見みえる子供こどもの時じ分ぶんになりたいたものだ。しかし、流ながれた水みずが、もう帰かえつてこないように、なれるものでない。」と、父ちち親おやは、考かんえがながら歩あるいていききました。

すると、ふいに、耳みみもとで、

「もう一度ど、おまえは子供こどもになれるから、心しん配ぱいをするな。」と
いったものがありました。

父親ちちおやは、はつと驚おどろきました。だれが、それをいったのだろう

と、くるくると頭あたまをあたりにまわしてみましたけれど、あたりに
は、だれも歩いてあるいるものはなかつたのです。また、だれも自分じぶん
の胸むねの中で思おもっていることを知しり得うるはずはなかつたのでありま
した。

不思議ふしぎなことがあるものだと思おもつて、空そらを仰あおぎますと、太陽たいよう
が円まるい顔かおをして、にこにここと笑わらっていました。

いま、そういつたのは、太陽たいようかと思おもいましたから、

「ほんとうに、私わたしはもう一度ど、子供こどもに帰かえれるでしょうか？ 私わたしは
世よの中なかの苦くろうをしました。私わたしの頭あたまからは、無む邪じ気きといふことがな
くなつてしまいました。私わたしはどう考かんえましても、木きの葉はや小石こいしや、

いぬ
犬ころを友だちとする気にはなれません。どうして、この私わたしが、
二度どと子供こどもになれるではありませんようか。」と、父親ちちおやはいいまし
た。

「もう一度ど、おまえを子供こどもにしてやる。」と、太陽たいようはいいまし
た。

ちちおや
父親は、それが自分じぶんの空想くうそうでないかしらん。いくら太陽たいよう
だつて、そんなことをいい得うるものでなからう！。それとも、自じ
ぶんぶんが死しんで、こんどふたたびこの世界せかいに生うまれ変かわつてきたとき
をいうのではなからうかと思おもいましたから、父親ちちおやは太陽たいように向む
かつて、

「ほんとうのごとでございますか。この世よで死しぬまでに、もう一

度、子供になれるではありませんようか。」とたずねました。

「そうだ、死ぬまでに、もう一度、子供にしてやる。」と、太陽はいいました。

「ああ、うれしい！」と、父親は、自分の子供を抱き上げていました。

「子供であることをうれしいとは、子供は思っていない。子供はまじめなんだ。子供のいうことをよく聞いてやれ！そして、子供を大事にしななければならない。」と、太陽はいいました。このときは、太陽も、まじめになって、いつものようにあいきょうよく笑っているようには見えませんでした。

そのとき、父親は、まだ年が若かったのであります。太陽

がいつかいったことを後には忘れてしまいました。いったことの意味は、思い出されても、なんで太陽がものをいうものか。あれは、みんな自分の描いた空想に過ぎなかつたと思つたであります。そして、あのときの子供は、大きくなりました。子供があのとときの父親の年ごろになつたときは、もう子供には、子供が産まれて、父親は、年をとつてしまいました。

父親に孫ができたわけでありませう。父親は、だんだん年をとつて、ついにおじいさんになつてしまいました。

このおじいさんは、いいおじいさんで、やさしく孫たちをかわいがりました。だから、孫たちは、おじいさん、おじいさんといつて懐きました。しかしおじいさんは、もう孫たちのめんどうを

見ることができなくなつたほど年をとつてしまいました。

すると、おじいさんは、いつとはなしに、この世の中での、うるさかつたこと、めんどろだつたこと、心をなやましたこと、また苦しかつたこと、いろいろなことが忘れられてゆきました。

おじいさんの目は、子供の目のように美しく澄んできました。すると、なんでも、目に映つたものは美しく見えました。おじいさんは、道ばたに咲いている山茶花も、菊の花も、みんな心あつてなにか物語ろうとして見るように見られたのです。おじいさんは、つえを止めて、腰を伸ばして、ぼんやりとそれに見とれていました。

小鳥が、木のこずえにきて鳴いていると、おじいさんは、また

立ち止まって、その鳴き声に聞きとれていました。

ある日のこと、おじいさんは、孫たちに手を引かれて歩いていました。

「おじいさん、ここは水たまりですよ。この板の上をトン、トンとお歩きなさいよ。」と、孫たちに教わって、おじいさんは、その水たまりを歩いていました。

おじいさんには、なにもかもこの世界が美しく、そして、広く見られたのであります。

太陽は、大空から、下を見ていました。そして、この有り様を笑顔でながめていました。

昔、あのおじいさんは、自分の子供を、ちやうどあのように手

を引ひいて、この道^{みち}を歩^{ある}いたことがあつた。いまは、孫^{まご}たちに手^てを引^ひかれて、ああして歩^{ある}いてゆく。

「どうか、もう一度^ど子供^{こども}の時分^{じぶん}になつてみたい。」と、あの時分^{じぶん}いつていた。そして、そのとき、俺^{おれ}が、「もう一度^ど、おまえを子^こ供^{ども}にしてやる。」といつたら、たいへんに喜^{よろこ}んだものだ。いまあのように子^こ供^{ども}と同じ^{おな}である。

こう、太陽^{たいよう}は考^{かん}えると、下^{した}を歩^{ある}いているおじいさんに向^むかつて、

「三十年^{ねん}も、四十年^{ねん}も昔^{むかし}に、もう一度^ど子供^{こども}になつてみたいといつたが、いまおまえは、どんなに、考^{かん}えている？」と、太陽^{たいよう}はたずねました。

しかし、おじいさんは、知らぬ顔^{かお}で、とぼとぼと歩^{ある}いていました。おじいさんには太陽^{たいよう}のいったことが、ちようど子供^{こども}のよう
にわからなかったのであります。

——一九二二・七作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「幾年《いくねん》もたつた後《のち》」となつています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幾年もたった後

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>